TADOKU JUNIOR　西風かあさんのおはなし（バージェス）　★★★☆☆ ふつう　824語

Mrs. Redwing's Speckled Egg

レッドウィングおくさんの もようつきのたまご

Thornton W. Burgess（1910年の本）　**原文そのまま**　朗読：Laurie Anne Walden

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　朝のみどりの野原で遊ぶ陽気なそよ風たち。鳥のたまごをぬすもうとする男の子から、すを守るために、そよ風たちが考えたのは……？



Old Mother West Wind came down from the Purple Hills in the golden light of the early morning. Over her shoulders was slung a bag—a great big bag—and in the bag were all of Old Mother West Wind's children, the Merry Little Breezes.

Old Mother West Wind came down from the Purple Hills to the Green Meadows and as she walked she crooned a song:

When she reached the Green Meadows Old Mother West Wind opened her bag, turned it upside down and shook it. Out tumbled all the Merry Little Breezes and began to spin round and round for very joy, for you see they were to lay in the Green Meadows all day long until Old Mother West Wind should come back at night and take them all to their home behind the Purple Hills.

First they raced over to see Johnny Chuck. They found Johnny Chuck sitting just outside his door eating his breakfast. One, for very mischief, snatched right out of Johnny Chuck's mouth the green leaf of corn he was eating, and ran away with it. Another playfully pulled his whiskers, while a third rumpled up his hair.

Johnny Chuck pretended to be very cross indeed, but really he didn't mind a bit, for Johnny Chuck loved the Merry Little Breezes and played with them everyday.

And if they teased Johnny Chuck they were good to him, too. When they saw Farmer Brown coming across the Green Meadows with a gun one of them would dance over to Johnny Chuck and whisper to him that Farmer Brown was coming, and then Johnny Chuck would hide away, deep down in his snug little house under ground, and Farmer Brown would wonder and wonder why it was that he never, never could get near enough to shoot Johnny Chuck. But he never, never could.

When the Merry Little Breezes left Johnny Chuck they raced across the Green Meadows to the Smiling Pool to say good morning to Grandfather Frog who sat on a big lily pad watching for green flies for breakfast.

“Chug-arum,” said Grandfather Frog, which was his way of saying good morning.

Just then along came a fat green fly and up jumped Grandfather Frog. When he sat down again on the lily pad the fat green fly was nowhere to be seen, but Grandfather Frog looked very well satisfied indeed as he contentedly rubbed his white waistcoat with one hand.

“What is the news, Grandfather Frog?” cried the Merry Little Breezes.

“Mrs. Redwing has a new speckled egg in her nest in the bulrushes,” said Grandfather Frog.

“We must see it,” cried the Merry Little Breezes, and away they all ran to the swamp where the bulrushes grow.

Now someone else had heard of Mrs. Redwing's dear little nest in the bulrushes, and he had started out bright and early that morning to try and find it, for he

wanted to steal the little speckled eggs just because they were pretty. It was Tommy Brown, the farmer's boy.

When the Merry Little Breezes reached the swamp where the bulrushes grow they found poor Mrs. Redwing in great distress. She was afraid that Tommy Brown would find her dear little nest, for he was very, very near it, and his eyes were very, very sharp.

“Oh,” cried the Merry Little Breezes, “we must help Mrs. Redwing save her pretty speckled eggs from bad Tommy Brown!”

So one of the Merry Little Breezes whisked Tommy Brown's old straw hat off his head over into the Green Meadows. Of course Tommy ran after it. Just as he stooped to pick it up another little Breeze ran away with it. Then they took turns, first one little Breeze, then another little Breeze running away with the old straw hat just as Tommy Brown would almost get his hands on it. Down past the Smiling Pool and across the Laughing Brook they raced and chased the old straw hat, Tommy Brown running after it, very cross, very red in the face, and breathing very hard. Way across the Green Meadows they ran to the edge of the wood, where they hung the old straw hat in the middle of a thorn tree. By the time Tommy Brown had it once more on his head he had forgotten all about Mrs. Redwing and her dear little nest. Besides, he heard the breakfast horn blowing just then, so off he started for home up the Lone Little Path through the wood.

And all the Merry Little Breezes danced away across the Green Meadows to the swamp where the bulrushes grow to see the new speckled egg in the dear little nest where Mrs. Redwing was singing for joy. And while she sang the Merry Little Breezes danced among the bulrushes, for they knew, and Mrs. Redwing knew, that some day out of that pretty new speckled egg would come a wee baby Redwing.

西風かあさんは、朝早くの金色の光の中を、むらさきの山からおりてきました。かたには大きなふくろ――とても大きなふくろ――をかけていて、そのふくろの中には、西風かあさんの子どもたち、陽気なそよ風たちがみんな入っていました。

西風かあさんは、むらさきの山からみどりの野原へおりてきました。そして歩きながら、こんな歌を小さな声で歌いました――

みどりの野原につくと、西風かあさんはふくろをあけて、さかさまにしてふりました。陽気なそよ風たちはころころととび出して、うれしくてたまらずに、くるくるくるくる回りはじめました。だって、夜になって西風かあさんがむかえに来て、むらさきの山のむこうのおうちへつれて帰ってくれるまで、一日じゅうみどりの野原で遊んでいられるのですから。

そよ風たちはまず、ウッドチャックのジョニーに会いにかけていきました。ジョニーは、おうちの戸口のすぐ外にすわって、朝ごはんを食べていました。ひとりのそよ風が、いたずらをして、ジョニーが食べていたトウモロコシの緑の葉っぱを口からさっとうばいとり、もってにげていきました。べつのそよ風はふざけてジョニーのひげを引っぱり、三ばんめのそよ風は毛をくしゃくしゃにしました。

ジョニーはとてもおこったふりをしましたが、ほんとうはちっとも気にしていませんでした。ジョニーは陽気なそよ風たちが大すきで、毎日いっしょに遊んでいたのです。

それに、そよ風たちはジョニーをからかうこともありましたが、やさしくしてあげることもありました。ブラウンさんが鉄ぼうをもってみどりの野原をやってくるのが見えると、そよ風のひとりがジョニーのところへおどっていって、「ブラウンさんが来るよ」とささやきます。するとジョニーは、地面の下のあたたかい小さなおうちのおくふかくにかくれてしまいます。ブラウンさんは、どうしていつもジョニーをうてるほど近くまで行けないのだろうと、ふしぎでふしぎでなりませんでした。でも、どうしても、どうしても近づけなかったのです。

ジョニーとわかれると、そよ風たちはみどりの野原をかけぬけてにこにこ池へ行き、カエルのおじいさんにおはようを言いました。カエルのおじいさんは大きなスイレンの葉にすわって、朝ごはんにする緑のハエが来るのを待っていました。

「チャガラム」とカエルのおじいさんは言いました。それがおじいさんの「おはよう」なのです。

ちょうどそのとき、太った緑のハエがとんできて、カエルのおじいさんはぴょんととび上がりました。またスイレンの葉にすわったとき、太った緑のハエはどこにも見えませんでしたが、カエルのおじいさんはとてもまんぞくそうな顔で、白いチョッキをかた手でなでていました。

「カエルのおじいさん、なにかニュースはある？」と陽気なそよ風たちはさけびました。

「ハゴロモガラスのレッドウィングおくさんが、アシの中のすに、ぽつぽつもようの新しいたまごをうんだよ」とカエルのおじいさんは言いました。

「見に行かなくちゃ！」と陽気なそよ風たちはさけび、みんなでアシのはえているぬまへかけていきました。

ところで、レッドウィングおくさんのアシの中のかわいい小さなすのことを、ほかにも聞きつけた者がいました。その子は、すを見つけようと、その朝早くから出かけていたのです。もようのついた小さなたまごが、きれいだからというだけで、ぬすみたかったのです。それは、ブラウンさんの家の男の子、トミー・ブラウンでした。

陽気なそよ風たちがアシのはえているぬまにつくと、かわいそうに、レッドウィングおくさんはすっかりこまりはてていました。トミー・ブラウンにかわいい小さなすを見つけられてしまうのではないかと、心配だったのです。トミーはすのすぐ近くまで来ていて、目もとてもとてもするどかったのですから。

「たいへん！」と陽気なそよ風たちはさけびました。「わるいトミー・ブラウンから、レッドウィングおくさんのきれいなもようのたまごを守ってあげなくちゃ！」

そこで、そよ風のひとりが、トミー・ブラウンの古いむぎわらぼうしを頭からさっとふきとばして、みどりの野原のほうへとばしました。もちろん、トミーはぼうしを追いかけました。トミーがかがんでひろおうとしたちょうどそのとき、べつの小さなそよ風が、ぼうしをもってにげていきました。それからそよ風たちはかわりばんこに、トミーがもう少しで手がとどくというところで、ひとり、またひとりと、古いむぎわらぼうしをもってにげていきました。にこにこ池のそばを通りすぎ、わらう小川をこえて、そよ風たちは古いむぎわらぼうしをとばしながらかけていき、トミー・ブラウンはそのあとを追いかけました。トミーはぷんぷんおこって、顔をまっかにし、はあはあと息を切らしていました。みどりの野原をずっとよこぎって森のはしまで行くと、そよ風たちは古いむぎわらぼうしを、トゲのある木のまん中にひっかけました。トミー・ブラウンがやっとぼうしをもう一度頭にかぶったときには、レッドウィングおくさんのことも、かわいい小さなすのことも、すっかりわすれていました。それに、ちょうどそのとき朝ごはんを知らせるラッパが聞こえたので、トミーは森の中のひとりぼっちの小道を通って、家へ帰っていきました。

そして陽気なそよ風たちはみんな、みどりの野原をおどりながらアシのはえたぬまへ行き、かわいい小さなすの中の、新しいもようのたまごを見ました。レッドウィングおくさんはうれしくて歌っていました。おくさんが歌っているあいだ、陽気なそよ風たちはアシの中でおどりました。そよ風たちも、レッドウィングおくさんも知っていたのです。いつか、そのきれいな新しいもようのたまごから、小さな小さなハゴロモガラスの赤ちゃんが生まれてくることを。

たんご と クイズ　レッドウィングおくさんの もようつきのたまご

bag ふくろ	**whiskers** ひげ	**lily pad** スイレンの葉
egg たまご	**nest** （鳥の）す	**straw hat** むぎわらぼうし
thorn tree トゲのある木		

Q1 そよ風たちがジョニーにささやいて知らせるのは、どんなとき？

① 雨がふりそうなとき　② ごはんの時間　③ ブラウンさんが鉄ぼうをもって来たとき

Q2 トミー・ブラウンは、なにをしようとしていた？

① 鳥のたまごをぬすむ　② 魚をつる　③ 花をつむ

Q3 そよ風たちは、トミーのぼうしをどこにひっかけた？

① にこにこ池のスイレン　② 森のはしのトゲのある木　③ ブラウンさんの家の屋根

こたえ

Q1　③　ブラウンさんが鉄ぼうをもって来ると、そよ風がジョニーに知らせます。だからジョニーは、いつもうまくかくれられるのです。

Q2　①　もようのたまごがきれいだからというだけで、レッドウィングおくさんのすから、たまごをぬすもうとしていました。

Q3　②　森のはしのトゲのある木のまん中にひっかけました。ぼうしを取りもどしたころには、トミーはすのことをわすれていました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #2557（Thornton W. Burgess、1910年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Laurie Anne Walden（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。